（様式1）

令和5年度　学力向上指導改善プラン

三田市立広野小学校長　朝倉　美穂

学校教育目標	魂みがく　学びにはげむ　心をつなぐ 広野っ子の育成
推進主体	管理職　校内学力向上委員会

			学力に関する前年度の状況・経年の課題等
学力の状況	全国学力・学習状況調査結果の状況（国語、算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む）	国語	○「読むこと」「書くこと」の領域では、どちらも正答率が全国平均より10%以上である。 ◆「書くこと」の領域3二では、正答が48%（全国37.7%）と全国に比べ上回っているが、国語を得意とする児童も書けていない実態がある。正答に必要な言葉や文を本文から取り上げることはできるが、述べ方の良さについて記述できておらず、1つの文章からの情報だけで回答している。複数の文章を読み双方の内容を踏まえて考える力に課題があることが見える。 ◆「話すこと・聞くこと」の領域1四では、二つの意見のうちどちらかを選んで理由や意見を述べることはできるが、解決方法にまで考えが至っておらず、話し合いの目的を意識して意見を作り出すことに課題がある。
		算数数学	○正答率は、全ての領域で全国平均を上回っている。 ◆「飲み物の量を半分にしたときの、果汁の割合について正しいものを選ぶ」設問では、正答率が28%（全国21．4%）とかなり低い正答率になっている。72%の児童が、飲み物の量が半分になると果汁の割合も半分になると誤って捉えており、量と割合の意味を正しく理解できていないことが考えられる。 ◆式や言葉で答える設問の無答率が高く、正答率が低くなっている。
	定期テスト、単元テストなどによる状況（各教科）		○単元ごとにテストを実施し、未定着の児童には同じ問題や似た問題に取り組ませる等して定着するまで個別指導を行っている。（経年） ◆題意を正確に捉えられず、問題文を読み取りきれずに誤答する傾向が見られる。
	授業等からうかがえる状況（各教科）		○ユニバーサルデザイン（焦点化、視覚化、共有化）を取り入れた授業づくりに努めている。（経年） ◆進んで話し相手に説明しようとする児童が増えつつある一方で、相手意識や目的意識に応じた適切な表現の具体的な指導法を工夫する必要がある。 ◆語彙力を高めるため、読書習慣を活性化するとともに、辞書を活用する活動を工夫して取り入れる。
学力向上に係る学習習慣・生活習慣等の状況	全国学力・学習状況調査の質問紙の状況		◆テレビゲームをしている時間が、「一日当たり4時間以上」と答えた児童が全国平均よりも10ポイント以上高い。 ◆「家で自分で計画を立てて勉強をしているか」という問いに対し「あまりしていない・全くしていない」と答えた児童が44%と全国平均を20%近く上回っている。 ◆一日の読書時間が30分以上と答えた児童が16%となった。全国平均は36.5%で、20ポイント下回っている。
	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況		○「友達と協力するのは楽しいと思いますか」では、当てはまる・どちらかといえば当てはまるの合計の割合が、100%で全国平均を上回っている。 ◆「すすんで本を読んでいる」と回答した児童が、昨年度から8%増の73%となった。読書タイムの推進、毎月23日の読書の日の設定、図書司書が中心となった図書室の環境づくりなどが成果として表れていると考えられる。 ◆「基礎基本の学力が身についている」という問いに、「はい」と答えた児童が77%にとどまっており、昨年度から12%減となった。子どもたちの基礎基本の学力の定着と自立の力の育成に向けて、家庭との連携強化を図る。
校内研究・研修の状況	校内研究の状況		○児童理解を基本にし、個に焦点を当てながら全体に分かりやすい授業づくりをめざす。（経年） ○国語科の論理に目標を置き、授業のユニバーサルデザイン化をめざす。 ○「視覚化」「共有化」「焦点化」をキーワードにしながら、授業づくりにおけるポイントを明確化し、授業を見る際の検証軸に据える。
	校内研修の状況		○児童の実態から、特に特別支援教育に係る研修の重要性が高まっている。（経年） ○特別支援の観点に立った、全教科の授業改善に努める。 ○不登校への対策、人権教育の充実など課題教育に対する見識を深め、対応力の強化を図る。
家庭・地域等との連携	家庭・地域等の状況		○学校便りや学年通信を通じて学校の取り組みを発信し、懇談会・学級集会などを通じて、地域とともにある風通しのよい学校を創り、家庭教育の充実を促す。
	小・中における教科連携等の状況		○中学校区教育目標「夢に向かって、たくましく歩み続ける児童生徒の育成」の具現化を図り、9年間の成長を見守る。 ○スムーズな入学に向け、広野幼稚園と第1・5学年との交流を実施。

4月			2～3月	
学力向上に向けての重点的な目標	成果となる目標 （指標となる数値等）	具体的な行動目標 （成果目標達成のための具体的な手立て等）	年度末評価 （今年度の成果と来年度に向けた課題等）	評価
○ユニバーサルデザイン（焦点化、視覚化、共有化）を取り入れた授業づくりに努め、対話を通じて、互いの意見を関係づけたり、比較させたりしながら自分の考えを作り出すことができる機会を充実させていく。	○全国学力・学習状況調査の平均到達率が全国平均と有意差なし。 ○学校評価アンケートの達成度数値が前年度を上回る。 ○毎朝水曜日は「対話の時間」を設定し、学校全体で取り組む。	○単元、一授業における過程の構造化を学校全体で共有し、全ての児童にとって分かりやすい授業づくりに努める。 ○単元計画を児童と共有し、教室に掲示する。単元ごとのつけたい力を意識させ、単元終了後にはその力がついたか分析する。 ○国語辞典などを活用し、言葉の意味の理解を促進する。新出漢字では、漢字の意味や熟語についての理解の向上を図る。 ○日記や詩を書くことを習慣づけ、書くことへの抵抗をなくす。 ○ペアトーク・グループトーク等を活用しながら、自分の考えを交流する場を増やす。		
○ユニバーサルデザインの視点（焦点化、視覚化、共有化）を取り入れ、算数科における論理的思考力を高める授業づくりに努め、新たな思考を生み出せるように、ペアやグループ学習を多用するなど学習環境や学習形態を工夫する。	○全国学力・学習状況調査の平均到達率が全国平均と有意差なし。 ○学校評価アンケートの達成度数値が前年度を上回る。	○「つかむ(見通す)」「考える」「深める」「ふり返る」の4ステップの構造化によって、わかりやすい算数の授業をつくる。 ○ノート作りの指導によって、一人ひとりの学びを確実に定着させる。 ○兵庫型学習システム教員による、系統立てた指導を図る。 ○休み時間の個別指導、がんばりタイムでの放課後の補充学習を充実させ、課題のある児童への支援を行う。		
○主体的な学習習慣の定着を図る。	○全国学力・学習状況調査の平均到達率が全国平均と有意差なし。 ○学校評価アンケートの達成度数値が前年度を上回る。	○発達段階に応じた望ましい家庭学習や生活習慣の定着を図る。 ○学校・学級通信などで定期的に家庭に意識付ける。 ○家庭学習強化週間を実施し、家庭学習への取り組み状況を見える化し、家庭との連携を進める。		
○メディアに触れる時間やルールをコントロールできる生活習慣を身につける。	○全国学力・学習状況調査の平均到達率が全国平均と有意差なし。 ○学校評価アンケートの達成度数値が前年度を上回る。	○ペアやグループ学習を多用し、互いに自分の言葉で考え方や解き方を交流し合うことができるような学習を生み出す。 ○学級の雰囲気づくりとともに、対話での交流とともにタブレット端末を活用した意見交流を推進し、子どもたちが自分の考えをいろんな形で表現できるようにする。 ○中学校と連携し、ネットやスマホ、ゲームなどとの付き合い方を見直す場や機会を設定する。		
○毎月23日を「広野っ子読書の日」と設定し、読書習慣が身につく指導や環境整備を工夫する。	○「読書の時間」を週3回設定し、読書の習慣化を図る。 ○高学年での本の貸し出し数が増加する。 ○学校評価アンケートの達成度数値が前年度を上回る。	○低学年においては定期的に読み聞かせを行い、本への関心を高めさせる。高学年では、読書会を開き、本を読む機会を増やす。 ○高学年の図書室利用時間を設定し、低学年だけでなく高学年も図書室へ足を運ぶ機会を増やす。 ○学校司書から児童への通信を通して、図書室にどんな本があるか、周りの児童がどんな本を読んでいるかなど啓発する機会を定期的に設ける。 ○学級文庫を点検・整理して読書環境の充実を図る。また、国語の授業で扱った関連図書を学級文庫に並べることで児童が関心をもって読書ができるようにする。		
○ユニバーサルデザイン（焦点化、視覚化、共有化）を取り入れた授業づくりに努め、「ことばを使って豊かに表現する子どもたちの育成」をめざす。	○授業の振り返りで、単元でつけたい力に関する記述をし、自分自身でどんな力を獲得できたかが実感できるようになる。 ○国語アンケートで、年度初めよりも年度末に「国語が得意になった」と自信をもつことができる児童の割合を増やす。 ○学校評価アンケートでの達成率が向上する。 ○今年度の各学年の実践をデータや資料で保管し、来年度以降活用できるようにする。	○読みの用語の獲得の系統性を明らかにし、児童に生きて働く言葉の力を獲得させ、活用できるようにする。 ○ペアやグループ学習を多用し、互いに自分の言葉で考え方や解き方を交流し合うことができるような学習を生み出す。 ○一時間の授業の構造化を図り、どの児童も見通しが持ち、分かりやすい授業づくりに努める。 ○全職員が研究授業をする機会を設け、互いに授業を見合い研修に努める。 ○児童理解を核にし、個に焦点を当て、全体に分かりやすい授業作りに取り組み交流する研修会を設ける。 ○自主研修会を定期的に実施し、普段の授業づくりで悩んでいることなどを皆でシェアし、共に学び合える環境を整える。		
○家庭や地域への積極的な情報発信をさらに進め、より一層の連携を図る。	○学校園所連携交流会を年3回開催し、校長会や「学校園所連携」担当に加え「生徒指導」「人権教育」「特別支援」担当部会を定期的に開催する。	○学校便りやHP、学年便り・学級集会などを通じて情報を随時発信する。 ○中学校区での学校園所の校内研究会の積極的な参加と意見交流を図る。		